

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	秋刀魚
Author(s)	犬養, 孝
Citation	龍南, 199: 104-127
Issue date	1926-11-10
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/8889
Right	

秋 刀 魚

犬 養 孝

一

空は雲一つ無く晴れてゐた。

耳元に激しくプロペラの音が聞えて來ると、落着いた光を浴びて椽側に腰を掛けてゐた淳は、ぽんと讀みかけの「武藏野及落」を閉ぢて空を見上げた。ガラス張りの空にきら／＼光つた翼が、青桐の葉末を離れようとしてゐた。

「おばあさん！ 飛行機よ。こゝへ來てごらんさい。早く。」

火鉢の傍で髪を梳いてゐたおかつは、淳と呼ばれてふと立上らうとしたが、かけ聲許りで容易に立切らうともしないので、

「早くさ、早くしなくちや駄目よ、おばあさん」と淳はせき立てた。

「だつてお前、さうせいたつて、……よいとこしよ、どつこいしよ」

やつと立上つて松葉杖を取らうとして、おきまりの「よいとこしよ……」が出ると、淳は噴き出しながら「駄目だなあ、よいとこしよ」と、かけ聲をかけて、持つてゐた本を椽側に置くとずか／＼火鉢の傍に歩み寄つた。

「早くしなくちや駄目ぢやありませんか。もういつちまつたかも知れやしない。さあ、僕がおんぶしませう。」

背にのつて「だつて普通の人と同じには……」云ひながら椽側に出て見ると、飛行機はもう見えなかつた。青桐と干物柱の間

で風に揺れた蜘蛛の巣が、二三本の糸をきらつと引延ばした。

「ほうらごらんない、もう見えなくなつちやありませんか。だけどまた来るでせう。」

「さう直ぐは出来やしないよ」と口の中でぶつ／＼云つて、鼻の先にぶらさがつたやうな眼鏡を通して、松葉杖に寄つたまゝ空を見張つてゐた。淳は振り返つておかつのその姿を見ると、皺だらけの顔の中の象のやうに細い眼に、飛行機を見るだけの視力を疑はない譯にはゆかなくなつて、何か知ら頼りないものを見たやうな氣がして來た。そしてくるつと庭の方に向き返つてさうなる心を抑へた。

「おばあさん、また來ますよ。今日は旗日だからそれで來たんでせう。」

「何だつて……えい？」

「旗日さ」と、力を入れて云つた。

プロペラの音がまた激しくなると淳はおかつに合圖をした。青桐に翼が低く現はれても、おかつは「見えない」「見えない」と空に向つてまぶしさうに頸をひねつた。響音はいたづらに四間四方にも充たない蒼空に残して段々遠のいて行つた。諦めて火鉢へ去つたおかつは、髪を梳き／＼椽側の淳に話しかけた。

「わたしもう、もう、くして了つた。せんだつても志津ちゃんがおばあさん、いゝお月夜だから來てごらんないで云つてくれたが、お月様が二つにも三つにも見えるんだよ。すつかり駄目になつてしまつた。もうお迎へが来るんだよ。」

「さうを」と軽く返事をしておかつの愚痴から逃げた淳は、また本を読み出して、「若し君、何かの必要で道を尋ねたく思はば、畑の真中に居る農夫にきゝ給へ。農夫が四十以上の人であつたら、……」と云ふ處に來ると、郊外へたまらなく出て見たくなつた。秋だ。稻の穂が黄ばむ。尾花が咲く。林だ。丘だ。その間を縫つてゆく上水。武藏野！……と矢繼早に頭の中を駆け廻ると、やがて小春の日和の落著きがしみ／＼と味はれて來た。そしておかつと二人きりで、かうした靜かな朝を送ることが、何より幸福に思へた。何時までも何時までも生きてゐてくれるようにと、おかつの爲に祈ることをも忘れなかつた。

「若し少女であつたら近づいて小聲できゝ給へ。若し若者で……」と、淳は武藏野を浮べて、尙も讀み續けてゐると、
「淳ちゃん！お前、云はないこつちやないよ。え。」と云ふ聲が耳元に聞えるない、もうおかつの手が淳の額に當つてゐた。
「おばあさん！びつくりするぢやありませんか。」

何時の間にか、白髪頭をおぢや、せんにきりつと結つたおかつが、淳の横にぬつと出て、皺くちやの顔を朝の日光に一面浴びせてゐた。

「お前、云はないこつちないよ。」と云つて又淳の額を揉みながら、
「ぜんたいぶつつけたその時、よく水をつけて揉むなり、お医者様に見て貰うなりすりやよかつたんだよ。お父さんに云やあ、なめに男だからいゝの、手術すれば疵がつくのなんて云つて、ほつたらかしてゐるんだもの。第一、大きくなつてみつともないやねえ。」

「また始つた。」と云はうとして口籠つた淳は「だつて皆はそんなに目立ちやしないつて云つてますよ。」と改めた。

兎に角おかつは淳の顔さへ見れば、額のことを心配するのだつた。だが事實淳の額は少し高かつた。と云ふのは淳が小學校の二年の時、號令台から倒に落ちて下のたゝきで額をぶつつけてからと云ふもの、未だに瘤のやうになつて少し盛り上つてゐた。氣の弱い淳は、口が酔つばくなる程おかつに云はれたりしてゐるので、何時か人前を恥じて帽子を冠つてゐることが多い位だつた。おかつの眼にはこの額の高いのが眼觸りになつて仕方がないらしかつた。「今に角が生えるんだよ、」としつこい程何時も云ひくした。

「もういゝわ、おばあさん。どつちでも」と逃げると、

「鬼みたい……みつともない。」とおつかおせて云つた。そして額の手を離して椽側に繪草子を並べ始めた。

中には歌麿や北齋・廣重のものもあつた。虫くひだらけの五十三次や、長い煙管を銜へた傾城がいくつも並べられる様子は、遠い江戸時代から引き出されて、久し振りにひなたぼつこをしてゐるやうに思へて、物珍らしかつた。猫を廊の男女に仕立てた

繪草子は別けても面白いものだつた。――……炭火ほのめく夕べまで、思ひ思ひの戀風や、戀と哀れは種一つ、梅薫しく松高き、位はよしや引締めて、哀れ深きは見世女郎。――青編笠にぞろりとした着流しで二本の太刀を佩いた若侍が、一方の袂で口を隠し、格子の内から出た白い手に片手をぐつと握られて、……心のゆくまで秋の日を浴びてゐた。

「おばあさん、面白いのね、随分古いぢやありませんか。」

「あゝ、おばあさんの子供の時のさ。さあ御維新になるずっと前、嘉永か安政の頃のものもあるよ。」

「ウワア、おどろいた、ヘエ……随分古いのね。何時かおばあさん頂戴な、いゝでせう。」

「あゝ。」

「大事にとつて置くから。」

「これでもお前、今は大した値段がするさうだよ。何時だつけか左竹ヶ原のあのおまつさんがさう云つてゐたつけ。」

「さうでせう。僕なんかにはよく分らないけれど珍らしいもののやうね。」

「もつと澤山あつたんだが、お前のお母さんが子供の時随分破つたり棄てたりして了つたんだよ。」

淳は聞いてはならないものを聞いたやうな氣がして、どきつとして顔をそらせ、「さう」と軽く返事をした。

――俺は知らない、俺は知らない。――淳は眼を閉ぢ、耳を抑へ、頸を左右に振りながら、まつ直ぐに逃げて行きたい氣持になつた。――俺は知らない、俺は知らない。――淳は絶えずさう思つてゐた。

おかつはふと「お母さん」と云つて了ふと、考は繪草子から離れて了つて、

「お前のお母さんさへ生きてゐたら……」

と、かう切り出して歎息した。

「もう、おばあさん、そんな話はよしませう。」

と答へたが、淳が追ひ拂ふ手の下から何か知ら彼を追ひつめるものがあつた。頭に當てゝゐた兩手を、拂ひのけるやうに椽側に

置いて。

「もうよしませう。」と、小さな聲で云つた。

淳の母は彼が三才の時死んで行つた。淳はその顔を知らない。次の母は彼が小學校にはいる少し前に迎へた。彼は次の母に對して眞の母に對する心を失ふまいとした。眞の母に對するやうに仕へることは、母に對する最も忠實なる道であると考へた。彼はそれ以來、母のことについて兎や角云はれることを嫌つた。彼は何處迄もさうしたことは考へたくなかつた。「母がゐたら……」と考へることがある時には、「俺は知らない、俺は知らない」と口籠りながら考へることを避けた。然しお守をしてくれる人の少かつた爲に、簞笥に帶でいはへられて、玩具箱を相手にその附近を這つたり歩いたりして毎日を過した記憶、父の襟首につかまつたりした記憶、が彼を幾度かさいなんだ。かうした關係から彼は小さい時は別けてもおかつを慕つた。足の丈夫だつた頃のおかつは人一倍勝氣で何かにつけてよく外出した。淳は五つになつても六つになつても腰巾着を止めなかつた。晴れた日も曇つた日も、「おばあちゃん」、「淳坊、」の會話が、お宮の見晴台にか、街路にか、汽車の見える處にか、玩具屋の前にかに、聞かれたのであつた。

「さうかい、惡かつたね、つひ思ひ出しちやつたものだから。」おかつは涙ぐんで云ひ續けた。「だけどお前は小さい時それは可愛かつたよ。わたしの後ばかりついて來て……」

「さう。」

「何時だつてか、お前が五つ位の頃だつたらうね。わたしがまだ足の丈夫な頃だつたから。御徒町の紺屋かじやに行つた時お前が迷子になつてね。」

「さうさう、僕覚えてある。一寸外に出たら何處どこの家が紺屋かじやだか分らなくなつちやつたんだもの。」

「さうだらう。わたしがあそこのおかみさんと話してある間、一寸待つておいでつて云つたのに、外で太鼓の音がしたら何時の間にか出て了つたんだよ。用が済んで出て見るとお前がゐない。あちこち探して見ると、どうだらう、直ぐ横丁の電信柱の下で

泣いてゐるぢやないか。おばあさんくつてべそを掻きながらさ。近所の人が何處のお兒でせうなんて云つてゐたんだよ。小さい時は泣き虫で随分ぐづだつたね。」

「そんなことがあつたっけね。」

淳は夢見るやうに空を見て微笑んだ。際立つて美しい空の色にも氣が附かなかつた。

「まだあそこのおかみさん達者か知ら……」

おかつはかう結んで何か知ら懐しいものを探してゐるやうに、繪草紙を無意識にめくつてゐた。

時計が十一時を報せると、二人は夢から醒めたやうに柱の方を振り返つた。庭溱に映る日光がガラス板の上で絶えず躍つてゐたので、時計の針は見えなかつた。

その時台所に入聲がしたので淳は立上つて行つた。

「こんにちは、こんにちは魚屋でござんす。」と障子を開けるなり威勢のいい聲が聞えて、何時もの小僧が盤台を置いて立つてゐた。

「おばあさん、魚屋さんよ。」

「さうかい、何があるんだい？よいとこしよつと。」

と這つて台所へ出て來た。

「御隠居さん！こんにちは小鯛のいゝのか、かれひか鮎、なまりかはんぺん、秋刀魚に鯖、めざし……」

「小鯛はどんなんだい？」

「さよう、こゝんどこですがね。」

「さうね、今日は秋刀魚にしておきませうか。」

「ありがたうござんす。」

威勢のいい盤台をかつぐ音が消えたかと思ふと、新しい艶のいい秋刀魚が弓なりに曲つてめかごの中に入れてあつた。

「おばあさん！今夜も秋刀魚？」

台所の敷居に立つてゐた淳が、何か思ひ當る處があるやうに顔を擧めて云ふと、おかつは知らぬ顔でめかごを拾ひ上げた。

二

お詣りや見物や買物に一日を送り、身のまわりを人手にかけのるのを嫌つて、齒ぎしり噛んでも自分でやらなければ氣が濟まないのが、おかつの性分であつた。かうした勝氣がたゞつてか、御成街道で自轉車に轢かれて足をいためた爲、長いこと千住の名倉に入院してゐたけれど、遂に松葉杖をつかなくては歩けないやうになると、おかつは限りなく喘いだ。悔しかつた。來る人毎に愚痴を零した。事實それ以來は好きな外出も出来なくなつて春・秋ならばごく暖い日を見て街の様子を見物かた／＼お詣りをしたり、冬は足が痛むと云つて苦しみ續けるやうになつた。孫達を相手の隠居生活が始まつた。それでも、「まだ隠居する年ぢやない」等と、時折云ひ出して悔しがつた。

二三年をするうち段々落着いて來たおかつは、幾夏かを淳と淳の姉の志津江とを連れて、三浦半島の一漁村に過した。然し足の不自由につけ愚痴は絶えなかつた。

小學校の五年生の淳と女學校の二年の志津江とは、おかつの晩酌附きの長い御飯に附き添つて、蚊に喰はれながら暗くなつてゆく海を眺めてゐた。やれ煮方がまづい、言ひつけを聞かないの、深い處へ行くなとか、同じことを幾度か繰り返して二人に浴せては猪口を嘗めた。二人は、おかつの言葉を聞き流すと、沖の漁火を數へて簾蚊を追ひ拂つた。

「淳ちゃん！あれ何だと思ふ？」

「鳥賊釣りさ。」

「うそやよ！あれは流しつて云ふんだつて六さんが云つたわよ。六さんも今晚行つたんですつて。針の澤山ついた糸をずうつと流してあかえひや鰯を釣るのよ。」

「さうを。だけど誰だか鼻賊釣りの火だつて云つてたよ。一、二、三……随分あるのね。二十一もあらあ。」

「うそだわよ。流しつて云ふのよ。明日の朝濱で聞いてごらんさい。」

観音崎の燈臺が闇の中で明滅した。

「かうした時におかつは二人が自分を疎んじたことを怒つて、何處迄も二人を詰つた。詰られれば詰られる程、二人は聞えぬ振りをしてひそ／＼話し合つた。」

「姉さん！ほら、あそこで信號してら。サーチライトでね。」

「えー、きつと館山灣のよ。」

「さうね、書間澤山、驅逐艦が行つたもの。」

「横須賀ときつと信號のやり取りをしてるのよ。」

「淳も志津江も晴れた星ばかりの空に向つて縦横に動くサーチライトの美しさを、おかつに知らせたい心を無理に殺して、二人で話し合つてはくすく／＼笑つた。」

「随分お談義が長いのね。」

しまひにはこんなことを云ひ合つた。酔が廻ると、おかつは何時か眠つて了ふのであつた。

三人共寢床にはいつて、東京行きの汽船の汽笛がきれ／＼に長く聞えてくると、……

「姉さん、おばあさんも可哀想ね。」

「だけれど、あんまりなんですもの。」

等と寢返りをうつて二人は話した。

海岸での夏の生活には度々かうしたことが繰り返された。その翌年も……。その又翌年も……。かうしておかつは年を取つて八十の坂を越えた。淳は中學の三年になり志津江は女學校を卒業した。

冬と夏とがおかつには一番恐しかった。「今年程寒いことはない」、「今年程暑かったことはない」が、おきまりのやうに云はれ、冬は足の痛みを夏は身体の萎えを訴へて、暖かになれば……涼しくなれば……と口癖のやうに云つた。春と秋とを追ひながら生き延びてゐるやうなものであつた。愚痴は相變らず續いた。勝氣もよくならなかつた。衰へても疲れても人に従ふことを嫌つた。若い女中は一月として居切れなかつた。堪へきれないで隠居所から母屋に泣き込んで來た女もゐた。婆やは喧嘩をして出て行つた。母屋の誰もが隠居所へ行くことを嫌つた。

仕方なしにその年の秋の中ば頃、淳が隠居所へ行つて手傳ふことになつた。尤も上野の山の向ふにあつたおかつの家を、「若しやのことがあつては……」等の氣遣ひから、母屋の裏に來るように父に頼んだのも淳であつた。

淳とおかつの生活は難航海を免れなかつた。泣きく仕事をすることもあつた。

その頃一匹の棄犬が母屋に來たのに、御飯の残りをやつてから、すつかり淳に馴附いて了つた。學校から歸つて來ると、尾を振り跳んで來るやうにさへなつた。何種かは分らなかつたけれど、黒の斑のはいつた、そして長く耳を垂れた可愛い犬だつた。おかつもこれを愛した。

ある日犬は御飯を喰べなかつた。それ以來くく云つては悲しさうに低い聲で泣いて、椽側の下に蹲つてゐた。水や食物をやつても、口を持つて行つたなり震へながら頭を前足の上に落して、ちつと人の顔を見つめてゐた。そして訴へるやうに長くひいて泣いた。淳もおかつも心配した。

「どうしたんでせう？おばあさん！」

「もとく棄犬だし、親がないから育たないんだらう。それに、かう寒い風が吹くやうになつては……。」

それから二三日して犬の姿は見えなくなつた。椽の下にも庭にもゐなかつた。淳は暗い思ひがした。

「おばあさん、犬が見えなくなつたの。」

「えーぢやあ、とうく死んだんだよ。可愛想にまあ！」

「さうね。」

「だけれどお前、探してくれないかい？虫でもわくと不可ないから。」

「ええ、でも見えませんよ。」

「床下にでもゐやしないか？」

「そんな處にゐるもんですか。」

「ゐないとも限らないよ。」

淳は一枚々々疊を剥がして床を覗いた。おかづはその後をいぎつて附いて來た。然し姿は見えなかつた。

「ゐないぢやありませんか？」

「いゝや、きつとある。お前の探しやうが悪いんだよ。」

「だつておばあさん、今一緒に探したぢやありませんか？」

「いゝや、お前の探しやうが悪い。」

「だつて、確にゐなかつたぢやありませんか？」

「いゝや。」

こゝでおかつは、齒をくひしばつて頭を左右に素早く振つた。淳は腹が立つて堪らなかつたが、おかづの年を取るとともにひねくれてゆく根性が憐れまれた。おかづ自身もゐないと知りながら、折れることを避けて「いゝや」と云つてゐるやうに思はれた。何時か淳は涙を出してゐた。泣いたり腹を立てたりする自分に對する笞打ちも、むきになつて否定してくるおかづの言葉には、何時か消えて了ふのであつた。淳は母屋に泣き込んで父に裁きを頼んだ。

小犬は何處にか逃げて行つたことになつて、淳が再びおかづの處に戻つて來ると、自分の立腹に對する笞打ちが擡げて來て口惜しくなつて來た。

歳の暮に近づいて用事が段々増えて来ると、泣き度くなることが多くなつて行つた。然し出来るだけ耐へてゐた。

おかつは冷い風が吹き出すと一層噓ましくなつて来た。そして秋刀魚を肴にして晩酌を取る日が續くやうになつた。

街に電氣がつく頃になると、紫色の煙が火鉢の上から靜に漂ふやうに上つて、天井を燻すとするつと寒空に消えて行つた。

おかつはうしろに松葉杖を立て、魚を焼きながら、猪口を嘗め、自分と自分を圍る人々の過去に限りない呪咀で呼びかけた。おかつの斜め前の机に寄つて豫習をしてゐた淳は、おかつのこの言葉を聞いて、まつ暗なまつ暗なものを見たやうな氣がした。振り返つて見ても總てがまつ暗だつた。彼は戰慄いて耳を閉じた。

「……憎いやつ……畜生！」

「……畜生……」

耳元に漏れた。彼は何處へも逃げられない氣がした。暗黒！彼はおかつを憐れんだ。彼はおかつの肩から、背中から、白髪頭から、……身体全体にのしかゝる恐ろしい面相の魔を見た氣がした。

「畜生……」

齒ぎしりが聞えて来た。

「……」

「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、……」

秋になると、そして冬が来る時分には、何時も微かな紫色の煙に乗せられて、「過去」への皺枯れた聲の最後の呪咀と哀願とが相ついで、雨の夜に、晴れた空に、或は寒空にしめやかに上つて行くのであつた。

三

「淳ちゃん！一寸これをその棚に上げといってくれないか、えゝ！猫に取られると不可ないから。」

鹽を振りかけると、おかつはめかごの秋刀魚を渾に渡してから云つた。早く夕方が來て、一日の疲れと一日毎に重つてゆく愚痴とを、酒にことよせて叩きつけるのを楽しみにしてゐるやうに、も一度棚の魚の方を振り向いて座敷に隠れるおかつの丸つてくなつたうしろ姿をうつと見てゐた渾は、何かなし感傷に落ちて行つて、「また秋刀魚か……」と口の中で云つて見た。

「お坊つちやま！お食事」

女中の聲が母屋の台所から聞えて來ると、渾は救はれたやうな氣がして母屋に急いだ。座敷に突ひ込むといきなり

「姉さん！おばあさんはまた秋刀魚よ。」

と早口で云つた。

「あら、さうを。お魚もあらうに、何時もまあ、よく飽きないもんね。」

「いゝえ、姉さん、おばあさんは詩人なのよ。だつてね、秋刀魚つて秋から冬のものでせう。秋は万物の凋落する時、おばあさんはもう逆も年寄りでせう。」と云つて老人、秋刀魚、秋、煙……と一時に頭に浮べて、「だから何時死ぬか、何時死ぬかと思つてんのさ。その頼りなさをあの獨特の紫色の煙に託して、靜かに醉心地にならうつて云ふのよ。その意味で詩人さ。」

「だからあのお魚許り喰へるつて云ふの？」

「えゝ」

「それは違ふわ。おばあさんはちつとも詩人ぢやないわ。さう考へるあなたが詩人なのよ。」

「そんなことがあるもんですか。詩人つて云ふのは詩をクリエートする人でせう？」

「えゝ」

「だから僕はそれを傍で見てる人、即ち詩を讀む人、詩を感じる人、おばあさんは何にも知らずに詩をクリエートする人、即ち詩人さ。」

「おばあさん自身は無意識なのにあなたが意識する、そこに詩が出来る、従つてさう考へるあなたが詩人ぢやありませんか。」

淳は秋刀魚からとんでもない愚論をやつてゐるのに氣が附いて、

「何だか分なくなつちやつた。」と折れると、

「さうね、馬鹿々々しいわ。」と志津江が結んだ。

「どうしたんだい、御飯は？」二人の愚論にあつけに取られてゐた父が云ふと、お膳を取り卷いて笑ひ聲が一度に庭先にとび出した。

てれた二人は頭を掻いたり顎をさすつた。

友達に誘はれて午後を植物園に過した淳が、急いで歸路についた時には、もう街には電氣がついてゐた。しまつた……と思ひながら出来るだけ早足で母屋に着くなり、食事を済ませておかつの處に歸つて見ると、おかつはいきなり火鉢の處から、「お早よう、お歸りなさいまし。」とお先きまわりをしたので、「たゞいま、遅くなりました」が淳の口の中で出溢つた。

「遂になつちやつてね。」と云ひ切らないうちに、

「へッ、へッ……。」とこゝろで脊中を無理に反らして小さな眼を光らせると、焼きかけの秋刀魚を引つくり返した。

淳が格子戸を開ける前から魚を焼く匂ひがしてゐたが、部屋へはいつて見ると、紫色の煙が天井を一面に覆ふてゐた。障子を開けると煙はつと軒先に逃げて行つた。掃除等をし終へておかつの斜め前に机を置く頃には、もうおかつは、猪口を賞めては魚をつついで、臼のやうに口の中で捏ねながら顔を皺くちやにた。そして鼠色のおち、やん、やんに顎を突つ込んで丸まつたまゝ口と手とを絶えず動かしてゐた。

「おばあさん、昨日ね、僕の筆入れの中に蛾がはいつててね、一杯卵が生んであつたの。」

淳は雑誌に一二頁眼を通すと火鉢の方に顔を向けて云つた。

「何だつて？」

「蛾がねえ、筆入れの中で卵を生みつけたのさ。」

「がたあ何だい？」

「おばあさん、蟻知らないの？」

「知らない。」と語尾を上げて、おかづは顎をしやくつた。

「知らないことがあるもんですか。毎晩飛んで来るぢやありませんか。」

「へえ、わたしや始めて聞いたよ。」

「ぢやいゝわ、見せてあげるから」

いきなり淳は立ち上つて、「さあ」と力強く電氣の傘にとまつた蟻を、おかづの眼の前に突き出した。

一猪口飲み込むと、

「へえ、それがががつてえのかい。わたしや始めてだよ。」と云ひ張つた。

「だけどお前、大抵におよしよ、人をいぢめるのも。」

淳はこゝで何を云ふのかと、おかづの言葉に驚いた。

「がたあ何だい？人のことを我が強い？云はうと思つて……。」

淳はむきになつて云つてあるおかづを見て笑ひたいにも笑へなかつた。おかづを勞らうとしても實際その剛情に飽きれて來ると、しまひには誰も「おばあさんは随分我が強い」と云ひ出すのが常であつたのを、こんなにも氣にしてあるかと思ふと、淳はむきになつて老人のおかつにくつてかゝつた自分達が憐れまれた。

「わたしはね、お前達に我が強い？と言はれる譯はないよ。間違つてゐるから間違つてゐるつて云ふんぢやないか。わたしはね、これでも随分、困つてゐる人にも恵んでやつてあるよ。赤十字路にも福田會にも、今でこそこんなに貧乏してゐるけれど、昔はやれどそこやれ何のつて、合はせたら随分澤山になるよ。根岸のおよしさんだつて、おはるさんだつて、御隠居さんはおえらいゝゝつて云つて、何時も來てくれたぢやないか。お前達許りだよ。人のことを我が強いだの、へつたくれだの何のつて云ふの

は。」

おかつは猪口を幾度か嘗めてかう云ひ出した。淳は「さう云ふ積りで云つたんぢやないんですよ。蛾がゐたから蛾がゐたつて云つたんぢやありませんか。」と言ひ譯をしても、聞えぬ振りで、おかつは幾度も同じことを繰り返へして、酔が廻るにつれ、あれを云ひこれを云ひ愚痴は際限なく續けられた。淳は黙つて眼を本の上に落して聞いてゐるより仕方がなかつた。

「こんなに皆からいぢめられる道理はありやしない。皆はわたしの死ぬのを待つてゐるんだらう。死なうと思へば何時でも死ぬる。引き窓の紐だつて死ぬる。さうして死んだら、あとの人がどんなに迷惑するだらうと思つて……」

「根岸のおよしさんも、おはるさんも亡くなんなすつた。わたしも早くお迎へが來ればいゝのに。いぢめた人には化けて出てやる。」

「……………」

「これでも元は澤山の地所を持つてゐたのに、白山の吉助があゝの通り使ひ込んで了ふ。お前のお母さんは死んで了ふ。わたしはこんなうちからお葬式を出さうとは思はなかつた……」

「……………」

「お迎へが來てくれれば。お迎へが來てくれるよう。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛——」

突然聲の調子が變ると、おかつは眼を泣き張らして袂を押し當てたなり、聲を上げて泣き出した。淳は、きれぐれに愚痴る聲を耳にして、唾をのみこんではおかつから顔をそらして俯向いてゐたが、立上つてお膳に寄りかゝつた。

「おばあさん！ どうしたんです？ えい？」

「おかまいでない、おかまいでない。」

「どうしたんです？」

「……………」

おかつはたゞ、お膳に眞白な顔をのせて泣き続ける許りであつた。お皿の上には秋刀魚が骨許りになつて横はつてゐた。空になつた土鍋の中には、茶碗と箸とれんげが入れてあつて、台所に出す許りになつてゐた。火鉢にくつついた魚の油が時折落ちると、しゅつと音を立て、紫紺の煙がおかつの白髪頭を掠め天井に擴つて行つた。煙がおかつの運命を誘ふのか、おかつが煙に運命を委ねるのか、淳はさう考へながらおどくする胸を抑へて、お膳の前に立て膝をしておかつの頸を見下してゐた。骨の上にびつたり皺だらけの薄い皮がくつついて、青い血管が肌にとび出て力なくびくついてゐた。――

おかつは泣き止んだ。淳は机に戻つて無意識に雑誌の頁を繰つた。

「淳ちゃん、御免よ。つい涙が出て來てアつて……。早くお迎へが來るといふのに。經帷子でもこしらへときませう。……………」

「おばあさん、大丈夫ですよ。まだくくお迎へなんて來るもんですか」

「いゝや、早く死んだ方がいゝ。いゝ。」

おかつはさう云ひ切ると、くるつと後向きになつて、茶簞笥の上の小さな箱の見たまさまにお燈おかりを上げて兩手を合せた。そして蠟燭が消えるまで南無阿彌陀佛を唱へ續けた。おかつは丸くなつたおちやんちやん姿を、前に後に同じ運動を續けて、高く低く波のやうに念佛を唱へた。見たまさまの中には淳の母の寫眞と、過去帳と、御飯の盛つた木皿があつた。念佛の間を虫の音が續つて行つた。淳は頭を上げて、茶簞笥の傍に立て掛けた二本の松葉杖に、若い時後家になつて以來苦しい半生を送つて來たおかつの姿を、次々に描いては消した。

蠟燭が消えると、おかつは見たまさまの過去帳をとつて順々に開いて行つた。

「淳ちゃん――」

「えい。」

「おちいさんが嘉右衛門と云つたのは知つてゐるだらう。」

「え、尊主討幕の方だつ、たんですつてね。」

「あゝ、それは元氣な人でね、議論の好きな人だつた。幕府の役人が何時も後をつけてゐたんだよ。」

「さう。」

「その又、おぢいさんは嘉兵衛と云つて庄内藩だつた。」

過去帳には殆んど毎日のやうに先祖の命日が記入されてあつた。おかつは夕食が済むとその日の命日に當る人の爲に祈つて、それから自分の後生を祈ると過去帳を擴げて、淳に先祖の話聞かせるのであつた。おかつが天保年間に生まれたことさへ、淳には珍らしくてならなかつた。別けてもおかつの前で、「大鹽の亂あつた年家慶將軍となり、老中水野越前守忠邦大に政治を改革し、風俗を改め……」等と、暗誦してゐる時には殊にさう思つた。

過去帳をしまつて火鉢の廻りを片附けるとおかつは居睡りを始めた。時折眼を開いて、

「淳ちゃん、うたたねはおよしよ、風邪を引くから。それちやお前、勉強も何も出来やしないやないか。」等と云ひ／＼火鉢の灰を一ならし二ならしして、又こくり／＼と火鉢の縁に頭をつけた。しまひには咽喉と鼻を鳴らす聲が部屋を壓するやうになつた。淳はおかつが無性に可愛くなつて、何時迄も元氣でゐるよう祈つた。そして何故におかつが人に嫌はれる性質を持つてゐるのかを疑つた。鐵瓶が音を立て出す頃には虫の音が際立つて鳴き始めた。

「おばあさん！風邪を引きますよ。」

「あゝありがたう、本當に眠りやしないから。」

「でも床にはいつておやすみなさい。ね、風邪を引くと不可ないから。」

「……」

一日一日と寒さが増して来るにつれ、おかづは酔が廻ると火壁に顔を伏せて居睡りをするやうになつた。時々顔を上げて思ひ出したやうに、口の中で「南無阿彌陀佛」「南無阿彌陀佛」ととぎれ／＼に唱へた。また顔を伏せるとやがて鼾が聞えて来るのであつた。淳はその聲を聞いて心の中で慟哭した。——おばあさんはこの先どうなるのだ。——降りて来る漂つてゐる暗い影を拂ふやうにして——それにしても氣の毒なことだ。——と彼は自分に呼びかけると、彼女の性質が憎まれて、一方彼女その人が限らない可愛い／＼ものになつた。火壁ごと蒲團ごと居睡りしたまゝおかづを抱き上げてやりたい。さう考へると抱き上げられたおかづが、「淳ちゃんや、大きくおなりだね。わたしはもうお迎へが来てゐる。あつちの家を頼むよ、ね淳ちゃん」と云ふやうな氣がして、「これは不可ない。これは不可ない。」と食るやうに書物に眼を落して暗い影を拂ひ除けた。

冬になると毎朝堅く氷の張る日が續いた。おかづは一日毎に衰へて行つた。足の痛みもひどくなつた。絶えず咳に苦しめられた。それでも床に就くことを嫌つて、翌年の正月にも人並みにお重結や屠蘇を揃へて、楓湖の描いた松に朝日の掛物のかゝつた座敷に年始の客を迎へた。

「御隠居様、まあお元氣で。今年はおいくつに？」

「ありがたう。いゝや、もう身体はこの通り、足は痛む、寒さは寒いし……。」

こんな會話がひつきりなしに續いた。

おかづは只管冬を恐れてゐた。足腰の痛むこと許りでなく何か知ら恐ろしいものが、寒い季節を通して横はつてゐるやうにおかつには思へた。「今年はきつと」、「今年こそ。」——出来るだけ遠ざからうとするのを引摺られるやうにして冬の最中に引っぱり出されると、「今日か？」「明日か？」と毎日口に出ないことはなかつた。淳も夜明前を恐れた。聲高い鼾が聞えるとほつと肩を下した。

「おばあさん、もうお茶の水の櫻が咲いたんですつてね。姉さんがさう云つてましたよ。」

「へえ、まだお前、こんなに氷が張るつて云ふのに。」

寒い日が續いても「櫻」の聲を聞くと、おかつも淳も、「もう大丈夫。」と無言の中に云ひ合つた。

おかつはかうして幾冬かを過す中に、肉は取られ、骨と皮許りになつて、へと／＼になつて春に漕ぎ着けた。暖くなると勝氣と愚痴とが靜かに頭を擡げて來た。

然し大地震後はめつきり年を取つて了つた。家が半破壊になつたので巢鴨に明くる年の春まで移つてゐたが、おかつの世話に當つてゐた新井夫婦は、淳の家の人達の避難先に來て、おかつの衰へた容體を度々報告した。

「奥様、御隠居様はあれ以來急にお年をお召しになりましたわ。もう下の方がすっかり不可なくなりましたの。御自分でお氣附きにならないんですもの。」

「まあ、さうですか。本當に御厄介になりますわね。あちらの家の修繕が早く出來るといふんですけれど。」

「もう御酒もおやめになりましたわ。」

かうした知らせが繰り返された。

元の家に歸つてからはおかつは二度と立てなかつた。と云つて病氣と云ふ病氣ではなかつたけれど、瘦せ細つた身体では再び部屋の中を歩き廻ることは出來なかつた。新井夫婦がおかつの世話することになつて、淳は母屋に歸つたが、その後遠く九州の高等學校へ行くやうになつて、春・夏の休みにおかつの細い身体を狭い部屋に慰めるに過ぎなかつた。

かうするうちにおかつは八十八の春を迎へた。春の休暇に歸つた淳は毎日のやうにおかつの部屋を訪ねた。

地震後窓を取り附けたため、今迄暗かつた部屋が急に明るくなつた。暖い日光を身体一面に受けて、おかつは生きてゐるやうな死んでゐるやうな微かな呼吸をしてゐた。

「おばあさん！また遊びに來たの。おはようございます。」

「おはよう。」

「どう、身体の工合は？」

おかづは黙つて呼吸してゐた。

「どう、身体の工合は？」と淳は聲高く繰り返した。

「え、身体かい、もうすっかり駄目だよ。耳が遠くなつたし……。」

おかづは大儀さうに暫らく言葉が杜絶えると、

「どうだい、ちつたあ、あつちの話でもしてお聞かせな。」と問ひ返した。

「え、だけど、別に面白いことも……。」

「何だね、耳が遠いもんだから面倒くさがつてゐるんだよ。お魚はどんなのがあるい？」

「お魚？さあ。あつちは鯛が多いの。それから太刀魚つて云ふのが……。」

「へえ、あの細長いんだらう？」

「ええ。その位さ。」

「『その位さ』かい。今の若い人は面倒くさがるから不可ない。この間來た按摩さんなんか、御隠居さんはまだそんなにお耳は遠かあござんせんつて云つてたよ。そこにお前が送つて來た朝鮮飴がある、出してお喰べ。」

おかづは身体を動かさないで口の先でこれだけ云ふと、「三度口をもぐ／＼させて唾を飲み込んだ。やがて微かに鼾が聞えて來て、眠に落ちてゐた。

——太刀魚……秋刀魚。——

淳はふと思ひ浮んだ。猪口を傾けながら「憎いッ」と齒ぎしをかんた、おかづ、障子の隙間から逃げてゆく紫色の煙、……がすつと眼の前を走つて行つた。淳は出來るだけ追つて取り戻さうとした。遠くで、おかづが苦笑ひをして駈けて行つた。

——駄目だ。あれは昔のことだ。

淳は窓口からおかつの頬へと眼を移した。皺くちやな顔に兩眼と兩頬が深く落ち込んで、大きく口を開け擴げたまゝ、頬骨と

上顎を高く突き出してゐた。呼吸が投げ出したやうに鼻孔に静かな音を立て、抜けて行つた。一息毎に、おかつは生命全体を託してゐるやうに淳には思はれた。死に向つて引き摺られて行くおかつの姿が浮んだ。おかつは眼を開く。おかつは眼を閉じる。吐息をはく。おかつの一日一日は油のきれた發動機船が大洋へ投げ出されて、果しない見知らぬ國へとぎれ／＼の音を立て、漂つてゐるのと同じだ。いやおかつは死んでゐる。勝氣な性質がその形骸を墓場に送んで行くのだ。淳はさう考へた。地震を限りにおかつの身体のひとつく姿へ衰へたのを淳は知つた。最初の一揺れが終つて辛うじて潰れることを免ねられたこの家から、簾筒の傍に蒲團を冠つてゐたおかつをおおい出して、その翌日の夕、後に一面の火を負ひながら避難の人達に慰められ勵まされて、巢鴨まで不具のおかつをおぶつて行つたことが淳に思ひ出された。

火柱は夕方の空をまつ赤に彩つて幾筋も上つてゐた。夕闇は容赦もなく襲つて來た。淳は尻をはしよつてゐた。おかつは頬冠りをして淳の脊にのつてゐた。物凄じい地鳴りが來る度に、人々は泣き喚き最後の瞬間を描いて戰慄した。淳は一足一足と崩壊した家の間を分けて、泣き叫ぶ子供を抱いた人の後につき、棒つちぎれ持つて跛をひく男の後について歩いた。

淳はこの時からおかつの身体がぐつと變つたことを思ふと忘れられなかつた。そして「憎いッ」だの云へるだけの愚痴を云ひ又その愚痴を一々取りあつて口喧嘩をした頃を懐かしんだ。

おかつの顔を見つめながら考へに沈んでゐた淳を突然驚かして、

「淳ちゃん！まだゐたのかい、今日も又本讀みかい？」とおかつは眼を開けて云つた。

「えゝ。」

「何時あつちへゆくゝ？」

「もう二三日したら……。」

「今度はもうお名残かも知れないね。」

「そんなことありませんよ。大丈夫。」

「どうだか？もうお迎への夢許り見てゐるもの。」

毎日のやうに遊びに来てゐたが何時か旅立たなければならぬ日の來て了つた淳は、その朝早くおかつの家の窓を叩いた。靜かに窓を開けるとふつと眼を開けて舌の先で口をきいた。

「淳ちゃんかい、とうとう歸るの？」

「ええ、おばあさんもお身体お大事にね。」

「ありがたう、もうこれが見納めだよ。」

「いゝえ、大丈夫よ、おばあさん。またぢき歸るから。」

淳は「見納めだ」と思ふ心を抑へてかう云つた。

「昨日永藤のパンを買つておいたから汽車の中でも。」

「ぢや、戴きませう。」

「お前も元氣だね。」

「さようなら、お大事に。」

淳がぢつとおかつの顔から身体を一渡り見る間、おかつは小さな眼に涙をためて言葉もなく淳を見つめてゐた。淳もまた見返した。そして靜かにカーテンをひいてガラス戸をしめた。

——ことに依つたら、これが最後に……。

淳はおどくとして鉛色の空に不安を描いた。

五

——どこへゆくのだ？

——どこへゆくのだ？

——……………

薄墨色の雲は追ふ手を拂ふやうにして一面灰色の空に波を描きながら、東へ……東へ……素早く走つて行つた。

——何故逃げてゆくのだ？どこへゆく……………

——……………

波が大きくうつと渦を卷いた一端がちぎれて、雲間から太陽が銀色の光をちらつと投げた。押し出されたしぶきが光を隠すと再び幾重にも幾重にも大きく波を打つて捕へる手を振りはなした。

——これはどうしたと云ふのだ。

忘我に驚いた淳は眼を再び机上の巻紙に移した。

「拜啓、御悔みの電報は昨日慥に受取申候。老母は去月二十六日用事あり、車を驅りて白山の伯父の家に参り、翌二十七日は諏訪神社の祭禮にて御興の通るを眺め養錢を納め、大原よりの土産饅頭なども戴き居候處、二十八日朝少々發熱あり一同集まり候もさまでとは思はず、自分は後事を母上並に新井夫婦に頼み出勤致し（當直）、何時にても急變の場合は歸宅致す手筈を致し置き翌二十九日急に歸宅致し容態を窺ふに餘り宜敷無之、醫師の來診を待ち居候。醫師の談によれば熱は下り稍平熱に復し候も、食慾進まずれば漸次衰弱致し危險に陥るべく、そは長くて一週間四五日の間に分明致さんとの事、卅日は未明容態悪しく候も少々落付き居り候に付、自分は役所のこと引續きのため参り直に歸宅致候處、時々刻々危險に瀕し、醫師を迎へ候へどもその効無く、遂に午后一時長逝せられ申候。一日午後自宅に於て神式葬儀執行火葬に附し、昨二日納骨のため火葬場に参り遺骨及び位牌は白山の伯父の家に持來致され申候。志津江は病氣のため來らず。御身に電報打たざりしは電報により無理に出京する場合には御身の病氣に障りありては由々敷事と顧慮し、慥と葉書によりたる次第と御承知下され度、右迄。折角御病氣御大事に致され度

祈上候。他は一同無事、御安意あれ。母よりも皆より宜敷、一同御病氣を氣づかいひて止まざる次第に候。

父より。」

讀み終へると淳は、病氣と死去の二つの知らせの葉書を握つて、「夢ではなかつたのだ。死んだのは本當なのだ。もう死んで了つたのだ」と胸のうちに書きつけた。身体の中を執り取られたやうな、出端を挫かれたやうな、……淳は空虚な思ひがして。逃げてゆく雲の後をひつきりなしに追つてゐた。

淳は病を得て夏休みになつても歸京することが出来なかつた。暑い盛りを病床に呻吟し續けて、時々來る便りにおかつの元氣なのを聞いている、冬の休みを樂しみにしておかつへの氣懸りを握り潰してゐた。

九月にはいつてからは毎日雨降り續きで、めつきり涼しくなつた。窓下の葉けいとうは眞紅に色着いて晴れる日を待つてゐた。既に嫁に行つた志津江は身体の工合が悪くて立てなかつた。淳の病氣もまだ治らなかつた。

——やつぱりおかつは死んだんだ。俺も姉も臨終には添へなかつたのだ。僅かな人に守られて柩はあの街角を曲つて……。淳は、限らない呪咀と限らない憧憬とを街から街へ投げて見知らない國へ運ばれてゆく一つの魂を浮べた。そしてその魂の歩いたあとを次から次に拾ひ集めた。彼にはまだ松葉杖の持主が生きてゐるやうに思へた。涼しい風が吹く。秋だ。威勢のいい魚屋の聲が聞える。銀色がかつた蒼黒い艶のいい秋刀魚のはしりが俎の上でぽんと二つに切られる。切られた魚が、やがて松葉杖の持主によつて火の上にのせられる。紫紺の煙が天井に舞ひ上る……。彼にはまだこの事がこれから先あり得ないことだとは思はれなかつた。

時々雨がぱら／＼落ちて來て、瓦の上で小さく弾んだ。軒先にぶら下つた糞虫が、畑の黍の葉末を鳴らして來た風にくる／＼と廻つた。

淳は涙の出ないのを不思議に思つた。たゞうつろな氣持だけが彼の心を捕へてゐた。

——俺は幼年時代の半身を探してゐるのだ。

躍つてはちぎれ、雲はたゞ淳の視線の上を絶間なく飛んで行つた。